



## 採蜜体験でキューバと交流

日本での養蜂は西洋ミツバチが中心である。ところが生産性では劣るものの、低温でも活動性があり、性質もおだやかで、やたらとは刺さない等の特徴を持つ日本ミツバチが再評価されつつある▼こうした折、都市農業や有機農業への取り組みも含めて、持続的で循環型の社会づくりで先行すると喧伝されるキューバに足を運んできた。その実態を探る合間にハリナシミツバチの採蜜を体験した。ハバナから車で東南に三時間。キューバのほぼ中央の南側にあるサパタ湿原国立公園近くの兼業農家であるレオネルさん宅を訪問。自給的農業を営む中で養蜂にも取り組んでおり、地域での普及にも力を入れる▼ハリナシミツバチは文字通り針が退化し、刺されることがない。樹木の洞内に巣をつくるが、切り出した樹木を割ると、たくさんハチが飛び出し、ハチの巣が現れる。ミツバチの場合、蜜蝋で作られた六角形の巣房に貯蜜されるが、ハリナシミツバチでは、樹脂とハチ自らが分泌する蜜蝋とを混合して作られるプロポリスでできた蜜ポットに貯蜜され、蜜ポットは小さな卵が連なったような形をする▼この蜜はプロポリスでできた蜜ポットで貯蜜される故か、ミツバチ蜜に比べ格段に抗菌性が強く、薬としても多用される。専門家によれば、ハリナシミツバチは熱帯や亜熱帯地域に多く生息するそうで、近いところでは台湾が北限で、日本での飼養はかなわないらしい。まさに熱帯故の特産物。まとまった量での輸入はまだ難しく、当面はキューバを再訪する際の楽しみとするしかないようだ。(土着菌)